

## 怒りの悲劇

肥 田 友 宏

文学は歴史的存在である。作品は個々別々でも、我々が文学を広く深く読むうちに、作者や時代や場所を越えて、たがいに何らかのつながりを持つ事が分かってくる。我々はこれを「文学の系譜」と呼ぶ。

個々の作品を単独に読んでも明白なテーマが見つからずに混乱する時でも、伝統に基づく文学的系譜の上に作品を置いてみると自ずとその意味が理解される場合が多い。

私は英文学の中に The Story of Anger とでも言うべき系列があることを発見した。

もともとイギリス人は怒りっぽく執念深い性質なので、人との交流を円滑にするため The Sense of Humour (ユーモアの感覚) が発達したと言われる。English Humour の定義はさまざまで、「泣き笑いの味」「負け惜しみ」「逃げ口上」「やせ我慢」「忍耐のはけ口」などの解釈があるが、要するにそのままでは精神的、感情的に行きづまる危険から逃れる手段、すなわち発想を転換させる効果があると推測されており、これが英文学の特質となっている。

さてヨーロッパ文学の原点はギリシャであり、Homeros (英語名 Homer) の *Ilias* (英語名 *Iliad*) は悲劇の起源とされているが、そのテーマは叙事詩の冒頭に述べられたアキレスの怒り (The Anger of Achilles) である。Achilles は *Iliad* の中で、たとえ短くとも名誉ある生き方を選んでい。つまり英雄は命より名誉を重んじ、名誉ある死を望んだ。

Sing, O Goddess, the anger of Achilles son of Peleus, that brought countless ills upon the Achaeans.

Translated by Samuel Butler of *Erewhon*

(詩の女神ムーサよ、ペレウスの子アキレスの怒りを歌わせたまえ。それこそが数知れぬ苦しみをギリシャ人に与えたのだ。)

と言う叙事詩冒頭の1行は、先ず詩のテーマを予告して詩人がムーサ (Muse) から靈感を授かり、その力によって立派に歌いおさめたいとする祈りの気持ちをあらわしたもので、詩的 inspiration の発露を神に願う形式は後世の伝統になった。Milton の *Paradise Lost* もこの伝統に従っている。

キリスト教の唯一神イエホヴァ (Jehovah) すなわちヤーヴェ (Yahweh) 神も、本来怒りの神である<sup>1)</sup>。最後の審判を「怒りの日」とも呼ぶ所以である。

また我々人間も空腹になると猛獣と同じように怒りっぽくなり気分が荒れる。怒りは動物の自己防衛ないし自己保有の本能に由来すると考えられるので、人間固有の表情と言われる笑いに比べると本来的に大変 primitive で dramatic な感情だ。

ところで猫が笑うのを見た人はいない。人間だけが笑う動物とされるために、笑いの研究は行われるが<sup>2)</sup>、怒りについての考察は余り例を見ない<sup>3)</sup>。

文学とりわけ劇は感情の表現である。劇的という言葉には感情の吐露または爆発の意味が含まれ

ている。

怒りはpowerであり、ある種の破壊的energyである。怒りは平静を失い平和を破り秩序を乱してかえりみるところがない。これは悲劇の原因になる。

結論を先に言うなら、Shakespeareでは*King Lear*, *Othello*をはじめ *Titus Andronicus*, *Coriolanus*, *Timon of Athens*などがあり、旧約聖書の *The Book of Job* や *Paradise Lost* や *Wuthering Heights*, アメリカ文学では *Moby Dick* が挙げられるだろう。さらに *Look Back in Anger* など *Angry Young Men* の作品も数えられる。以下、順を追って作品の概略を述べよう。ただし良く知られたものは簡潔に、unpopular なものはやや詳細に…。

*King Lear* は老王 Lear が3人の王女に自分をどれだけ愛しているかを問い、その返答によって領土を分割授与しようとしたが、末娘 Cordelia が父の期待を裏切る答え方をしたのに激怒した王は、彼女を無一物で追放し、姉娘達の不実をののしって嵐の荒野をさまよったあげく、ついに自分と Cordelia の悲惨な死を招いた物語である。忘恩のうらみは怒りにその表現を与えた。

*Othello* では旗手 Iago の巧みな奸計にのせられた主人公が母の形見のハンカチという小道具によって副官 Cassio と妻 Desdemona の貞操を疑うよう仕向けられて、ついには彼女を絞殺してしまう物語である。嫉妬の怒りが表現されている。

*Titus Andronicus* は裏切りが怒りの連鎖となって、血で血を洗う復しゅうの応酬がなされた末に敵味方の大半が殺される悲劇で、いわゆる Revenge Tragedy (復しゅう悲劇) または Bloody Tragedy (流血悲劇) の系統に属しており、大筋は Greek Myth の Philomela 伝説に由来する。

ローマでは先帝の死後、二人の息子が互いに党派を組んで皇帝の位を争っていた。折しも英雄 Titus がゴート (Goth) 族との戦いに勝利をおさめ、戦死した二人の息子のひつぎとともに、敵国の女王 Tamora とその息子たちを捕虜にして凱旋する。彼は Tamora の命乞いにもかかわらず、しきたり通り彼女の息子の一人をいけにえにした。護民官を勤める弟の Marcus は Titus が皇帝になることをローマ市民は望んでいると言う。しかし王子 Saturninus は自分が皇帝になる事を強硬に主張した。Titus は謙虚に皇帝の位を彼にゆずると Saturninus は Titus の娘 Lavinia を妃にすると言う。しかし彼の弟 Bassianus が先に婚約していたことを盾に彼女を連れ去ろうとする。Titus は自分の意思にそむいた息子の一人を手にかけるが、Saturninus はむしろ喜んで妖艶な Tamora を妃にしてしまう。Titus によって自分の第一子をいけにえにされたことにうらみを抱く Tamora の復しゅうが始まる。

さて彼女には黒人の情夫 Aaron がいた。Lavinia に横恋慕している Tamora の二人の息子が、彼の奸智と母の手引きによって Bassianus を穴に落として殺害し、森の中で彼女を強姦し、そのことが知れないように Lavinia の舌を抜き両手首を切り落とす。さらに Aaron は Titus の二人の息子を穴の所にいざなうと、彼らが皇帝の弟を殺したのだと思わせて二人を死刑場へ引き立てる。Titus が懸命に許しを乞うと彼自身の片腕を切って皇帝に献上すれば良いと言う Aaron の言葉を真に受けて実行したにもかかわらず、皇帝から二人の息子の首と彼自身の手が嘲笑とともに返却された。彼の息子 Lucius はローマから追放され、ゴート族の軍隊を以ってローマに侵攻しようとしていた。皇帝 Saturninus は Titus の家で Lucius と会談する事を提案する。

一方 Aaron との不義の子を出産した Tamora は、これを抹殺しようとしたが、Aaron は自分の子をひそかに白人の子と取りかえて事をおさめようと画策した。

Titus の家では皇帝と皇后を迎えて会食する。Tamora が食した肉パイは彼女の息子 Chiron と Demetrius の首を粉にひいて血で練り上げたものだった。すべてを明かして復しゅうをとげた Titus は娘 Lavinia が受けた恥辱を清めるべく自ら彼女を手にかけた後 Tamora を殺す。彼は Saturninus にその場で刺されたが息子の Lucius が彼の恨みを晴らして自らは民衆に選ばれて皇帝の位につく。

Tamoraの遺骸は野にさらされ、姦夫 Aaronは生きながら首を出して地中に埋められて、ここに凄惨きわまりない復しゅう劇は終わる。

*Timon of Athens*は、アテネにTimonという大富豪の貴族がいて、常に盛大な宴会を催しては、自分の金品を気前良く人に与えていたので、周囲には彼の富を当てにする、卑屈な追従者どもの取り巻きが出来た。彼は友人達のために資産を湯水のごとく浪費したので、遠からぬ内に無一文になってしまった。そうすると彼等は手のひらを返したように薄情になって、危急の借用にも誰一人応じる者がなかった。その内にTimonから大方の人々に招待状が届く。彼が富を復活させたのかといふかりつつ出席した追従者どもの前に豪華な銀製の食器が現われる。おおいの布を取ると、ご馳走と見たのはただの白湯だった。Timonはそれを居並ぶ賓客にぶちまいて、彼等の仕打ちに報いたのち極度に世をのろい人を嫌ってアテネ郊外の洞窟にこもり、偶然に地中の金塊を発掘したが、それをも無視して人知れず世を去ったと言う話。

前述の *Titus Andronicus* やこの劇に限らず、宴会の場面はそれが思いがけない破綻を来す例が多い。例えば『眠れる森の美女』や『白鳥の湖』で宴会に招待されなかった悪魔や魔女が災いを予言する場面などがある。

次は *Coriolanus* について述べる。

紀元前5世紀頃のローマに Caius Martius という武将がいた。当時は貧富の差が大変ひどく、平民は常に貴族をねたま呪っていた。おりしも飢きが訪れて食料が不足した為、平民は貴族の手に有る穀物の貯蔵庫を開放せよと要求して、今まさに反乱を起こそうとするとところだった。彼らの憎しみの対象は Martius にあった。それは彼が貯蔵穀物の分配に反対したからである。だから民衆は彼を自分達の敵と見なしていた。そこへ Martius の親友であり、民衆にも信望の有る Menenius が出て、彼らをなだめ説得している時に Martius が登場し、直接民衆に向かって散々悪口雑言をあびせ、彼らを追い払おうとする矢先に、ローマの内紛を予測した隣国の Volsci 人たちが、勇将 Aufidius にひきいられて攻めて来るとの情報が入る。そこで Martius は Cominius および Lartius と共に出陣し、Volsci の領土 Corioli 市の城門を破って、単身敵中深く切り込む目覚ましい働きで、遂にこの町を落とし入れた武勲により、町の名に因んで Coriolanus という称号を与えられ、元老院によって consul (執政官) に選ばれる事になった。ところが執政官の候補者は町の market place で謙虚さを表す為のボロを身にまとい、戦争で受けた傷を民衆に見せて、彼らの支持を受けなければならなかった。どうしてもこの慣例に従おうとしなかった Coriolanus も Menenius の説得によって、ようやく町の広場に立つ決心を固め、どうやら型どおり民衆の賛成を得た彼が、元老院での就任式を待つばかりになった時、二人の護民官 Brutus と Sicinius に扇動された民衆が、「先ほど market place における Coriolanus の態度は、いかにも平民をバカにしており、功労の証拠である傷口も見せなかった」と言う事を理由に、consul の推薦を取り消そうとする。それを聞いた Coriolanus は護民官や民衆を散々ののしり始めるが、周囲の計らいで彼はいったんその場から退場し、事態収拾の為に同じ所で再び民衆と話し合う事となる。初め彼はガンとしてそれに同意しなかったけれども、母のいさめには抵抗し切れず、民衆から何を言われても決して腹を立てないと約束し、民衆の賛成を得て執政官になることを誓って家を後にした。しかし Coriolanus が人民の権利をうばい、自分一人の手に専制権を握ろうとしたのは、民衆に対する反逆だと護民官が非難するのを聞いて、彼は烈火のように怒り、友人の止めるのも聞かずに又もや彼らに暴言を浴びせてしまった。それを待ち構えたかのように、彼ら二人は Coriolanus が平民に悪口を言い、役人を侮辱し、腕力で国法に逆らったのは明白であるとして、彼を追放することを人民と共に決議した。

こうして追放された彼は、ひそかに Antium の町にかつての rival であった Aufidius を訪ね、ロー

マに復しゅうする為に彼と結託し、Volsciの大軍をひきいて破竹の勢いで進撃して来たのである。驚いたローマは何とかして和を講じようとCoriolanusの友人CominiusとMeneniusを夫々彼のもとに送るが、何れも目的を果たせずに帰ってくる。しかし最後に母のVolumniaが妻子と共に訪れて懇願するのを聞いて彼の心も砕け、条約を結び軍をかえしてVolsciに戻り、事の経過を報告しようとするが、彼のあまりの武名をねたんだAufidiusは、この行為をVolsciに対する反逆であると断言し、Coriolanusが逆上するスキをねらって数人の共謀者と共に彼を刺し殺してしまった。これがこの悲劇のあらましである。

Shakespeareと共に英文学の二大源流の一つと言われ、1611年に出版された欽定英訳聖書 *The Authorized Version of the Bible* (別名 *King James' Bible*) の *The Book of Job* (ヨブ記) で信仰厚いヨブは、神と悪魔の賭けによって幾多の災難が彼を襲っても、神を信じ神のわざを疑う事はなかったが、Job自身が忌まわしい病にかかった時は、さすがの彼も神をうらみ、自分を呪う言葉を長々と述べて怒りをぶちまける。しかし神にいましめられて我に帰ったあとは落ち着きを取り戻し、改めて神をたたえるという筋である。ちなみにこれはGoetheの劇詩 *Faust* 序曲の原型となった。

*Paradise Lost* は、人間の不実と神の摂理の正しさを歌うのがテーマとされつつも実際にはSatanの怒りと反逆が大きく取り上げられている。

英文学は何故か物語性がやや希薄だと思う。いわば話が長く続かない。例えばロシア文学のように長く一貫した筋にそって物語を進めるよりも、人物ならびに情景描写で読者を引っ張って行く方が得意なようだ。Shakespeare劇はplotとcharacterのどちらが重要かという議論があるが、私は躊躇なく後者を選ぶ。

*Wuthering Heights* ではHeathcliffの屈辱と怒りが彼とUrnshaw一族の破滅をまねく。

*Moby Dick* はアメリカ文学だが捕鯨船のAhab船長が巨大な白鯨に片足を奪われた怒りと復しゅうがIshmael一人を除く全員の死につながった。

このように見てくると最初に述べた通り英文学には怒りの感情を表現した多種多様な文学作品が歴史的必然のように配列され、文学的系譜を形作っていることが明白である。文学批評の集大成は文学史にあると言う持論を証明したことにもなるだろう。

## 注

1) 申命記4.22.24-5 etc.

2) ベルグソン『笑い』、メレディス『喜劇論』(何れも岩波文庫)、ハーン *Japanese Smile*

3) セネカ『怒りについて』(岩波文庫) くらいだろう。

(2001年10月15日受理)